

# 英文の読み方を考えるⅨ

## —法とモダリティーの理解に向けて②—

平井 正朗

(本稿は、No.76 に掲載された「英文の読み方を考えるⅨ—法とモダリティーの理解に向けて①—」の続編である。)

文の主語に if 節が内在する場合、仮定法を見落としがちである。識別の基準は、主節における助動詞の過去形[would, could, might, should]の有無と談話情報における基準となる時制である。文の主語に仮定法が含まれる場合、文の主語を「～があれば」と訳出すれば日本語らしくなる。

(01) People can and do learn the meanings of some words through dictionary definitions, so it would probably be unfair *to say that such definitions are completely unable to characterize the meanings of words*, but it should be clear that dictionary definitions cannot cover all of the meanings of all the words in a language. (宮城教育大)

(人々は辞書の定義を通じてある言葉の意味を知ることができ、実際にそうしている。だから、そのような定義は言葉の意味を特徴づけることがまったくできないと言うのは、おそらく不当であろう。しかし、辞書の定義が言語のすべての言葉のすべての意味を扱うことはできないということは、明らかではなくである。)

(01)は、形式主語構文で真主語に仮定条件が内在する事例である。「そのような定義は言葉の意味を特徴づけることがまったくできないとは言わないが、もし仮に言うとしたら」というニュアンスを読み取りたい。

(02) The court took the view that it would not have been unreasonable *to postpone the sterilisation until after consent had been ob-*

*tained in spite of the convenience of doing it on the spot.* (千葉大)

(裁判所は、不妊手術をその場で行うほうが便宜的ではあったが、同意が得られるまで延期したとしても不合理ではなかっただろう、という見解をとった。)

(02)は would not have been から仮定法過去完了を想定し、「不妊手術をその場で行うほうが便宜的ではあったが、同意が得られるまで延期することはない、たとえ延期していたとしても」という context を把握したい。

(03) Since we now know that most native South Americans have the same blood group (Group O), *the Inca transfusions would have been much less dangerous* than attempts in Europe, because there was an excellent chance that both donor and patient would belong to Group O and thus be perfectly matched.

(九州大)

(南米原住民の大半は、同じ血液型(O型)であることはわかっているので、インカ族の輸血は、ヨーロッパでの試みと比較した場合、それよりはるかに危険が少なかったであろう。ドナーと患者がどちらもO型であるために、ぴったり適合する可能性が非常に高かったからである。)

(04) My point: Jai and I had decided to uproot our family, and I had asked her to leave a home she loved and friends who cared about her. We had taken the kids away from their Pittsburgh playmates. We had packed up our lives, throwing ourselves into a tornado of our own making, when *we could have just cocooned in Pitts-*

*burgh*, waiting for me to die. (東京大)  
 (私の言いたいこと: ジェイと私は、家族で住みなれた土地から引っ越すことにした。それで、彼女に好きだった家や気遣ってくれる友だちのもとを去ることを頼んだ。子どもたちをピッツバーグの遊び友だちから引き離した。私たちは自らの生活をたたくで、自分たちで巻き起こした竜巻の中に飛び込んだ。ただピッツバーグにこもって、私の死を待つこともできただろうに。)

文全体に if 節が隠れている場合、頻繁に誤訳が生じる。ここでは、文の命題を逆にして訳出するとよい。(03)では、「たとえ危険があったとしても、それ以上に危険なものにはならなかっただろうに」というニュアンス、(04)では、「やろうと思えば、ただピッツバーグにこもって、私の死を待つこともできただろうに」という心理描写を味読したい。

(05) To be fair, however, Hero's engine was a pretty primitive machine, and to construct a steam engine *that would have produced any meaningful amount of power* was far beyond the technological capacity of the ancients.

(山口大)

(しかし、公平に言えば、ヘロンのエンジンはかなり原始的な機械であり、有意な動力量を生み出すような蒸気機関を作ることは、古代人の技術力をはるかに超えていた。)

(06) She came to speak in the voices of the dead: little girls who had been murdered in suburban parks, soldiers killed in one of the wars, lost sons and brothers. Sometimes, if I was early for my lesson, I would find myself riding up with her. Holding my violin case tightly, I pushed myself hard against the wall of the lift to make room for *the presences she might have brought into the lift with her*.

(東京大)

(彼女は、郊外の公園で殺害された幼い少女たち、ある戦争で殺された兵士たち、行方不明の息子や兄弟たちなど、死者の声で話し出した。ときどき私がレッスンに早目に来たら、彼女とエレベーターで乗

り合わせたものだ。バイオリンケースをしっかりと抱きしめ、ひょっとして彼女と一緒にエレベーターに連れてこられたかもしれない存在のために場所をあけようと、エレベーターの壁に自分の体を押しつけた。)

(07) It was entirely real, but the way I saw them changed that reality, making me so impressionably aware that I could recall *details I could not possibly have seen at that distance or with the naked eye*: the greenish-grey of one old man's eyes, and a stain near a shirt collar. Looking through into Miss Sampson's room was like that. (東京大)

(それはすべてが現実だったが、私のそれらへの見方がその現実を変えてしまい、それは、1人の老人の目の灰緑色やシャツのえり元のしみなど、そんな遠くから、あるいは肉眼ではとうてい見えるはずもなかった細部を私が思い出すことができたということ、敏感にまで意識させるものであった。ミス・サンプソンの部屋の中をのぞき込むのは、そのような感じだった。)

(08) When reality requires maximizers to compromise — to end a search and decide on something — apprehension about *what might have been* takes over. (筑波大)

(現実によって追求者が一調べるのをやめて、何かを決めるよう一妥協する必要があると、ひょっとしてどうなっていただろうかという不安でいっぱいになる。)

関係詞節に仮定法が内在する場合、「お手上げ」になる生徒は多い。(05)では、過去時制に着目。〈現実部分〉である to construct a steam engine に焦点を当て、命題を入れ換えて、「当時の蒸気機関は有意な動力量を生み出すことができなかった」と解釈する。(06)では、「死者と交信ができるという心霊術者である彼女の虚構の現実世界」の中で、「ありえないことだが、ひょっとして彼女が連れてきたかもしれない死者のために場所をあける」と解釈する。(07)では、「遠くから、あるいは肉眼では見ようとしてもとうてい見えるはずがなかった細

部」と解釈し、「ミス・サンプソンの部屋をのぞき込む私」の集中力に対する比喩を見抜きたい。(08)では、(現実部分)である *apprehension* に焦点を当て、命題を入れ換えて、「実際には起こらなかったとしても、ひょっとしてどうなっていたらどうか」と解釈すれば、文意が明確になる。

(09) *Thirty years ago*, most people in the United States who heard these statements in a speech would not have given them a second thought. *Today* the same statements would raise more than a few eyebrows — and perhaps tempers — in almost any audience.

(横浜市立大)

(30年前であれば、合衆国で演説の中でこのような発言を聞いた人のほとんどは、気にしたりはしなかっただろう。今日ならば、どこの聴衆でも同じ発言を聞けば、少なからぬ人が眉をつり上げ、おそらく立腹するだろう。)

if節の代用として副詞や前置詞+名詞、不定詞、分詞構文などの副詞句が使われることもある。without や but for といた表現は、文法問題でも頻度が高いため識別しやすいが、不定詞や分詞構文などが仮定条件を代用している場合は、見きわめにくくなる。読解過程では、主節における助動詞の過去形[would / could / might / should]の有無と談話情報における基準となる時制を検索しながら読まない誤訳につながる。(09)の第1文は *Thirty years ago* に、第2文は *Today* に仮定法が内在しており、過去(「30年前」⇒仮定法過去完了)と現在(「今日」⇒仮定法過去)の談話情報が(対比)されている。誤読例としては、対比関係を読み損なうだけでなく、すべて過去を基準として訳してしまうケアレスミスが散見される。

(10) An increasing number of young female graduates are trying to join agricultural companies that produce vegetables and fruits, considering them no different from the banks, manufacturers and other firms they might *otherwise* have joined.

(筑波大)

(ますます多くの若い大卒の女性が、野菜や果物を

生産する農業関連企業に就職しなければ就職していたであろう、銀行やメーカーやその他の企業となら変わらないと考えて、野菜や果物を生産する農業関連企業に就職しようとしている。)

*otherwise* があれば、「さもないければ、別の方法で、その他の点で」など、単語の意味は知っているも、談話の流れをおさえることが苦手な生徒が多いように感じる。(10)では、「野菜や果物を生産する農業関連企業に就職していなければ就職していたであろう、銀行やメーカーやその他の企業」とイメージしたいものである。

(11) Perhaps the strongest reason to think the planet could be home to something is that over the past 20 years, we've learned that many inhabitants of Earth live in environments as peculiar as those on Mars. Here, some organisms exist inside rocks — in the chilly wastes of Antarctica, or a mile deep in the ground. Others live in ice sheets, or breed in the strongest acids. *If it can happen here, it could possibly happen on Mars, too.*

(大阪大)

(ひょっとすると、火星が何らかの住処になっているかもしれないと考える最も有力な理由は、過去20年にわたって、地球に生息する多くの生物が火星と同じくらい特異な環境で生きていることがわかってきたからかもしれない。地球には、岩の中や、南極の冷え冷えとした荒野や、地中1マイルの深さに生息する生物もいる。氷床の中で生息するものや、強酸の中で繁殖するものもいる。もし、ここでそういうことが起こりうるなら、火星でも起こりうるかもしれない。)

(12) For example, *if the individual bias is also 2 : 1 to the right and if couplings are random, then four of nine pairs would be right kissers, one of nine would be left-kissing, and four of nine would be mixed; if choice is random in the last group (that is, two of these four pairs are right-turning and two are left-turning), the result for the nine couples would be a right-turn kissing bias in six of them.*

(東京大)

(たとえば、個人の傾きも右と左の比率が2:1で、無作為にカップルが組み合わされるならば、キスをするとき、9組のカップルのうち4組は頭を右へ、1組は左へ傾け、4組は右と左が入り混じることになるでしょう。最終グループで選択が無作為に行われるならば(つまり、これら左右が混在する4組のうち2組が頭を右に、あとの2組が左に傾ける)、9組のカップルの結果は、6組が頭を右に傾けてキスするでしょう。)

直説法と仮定法の混用は時事英語に頻繁に見られる形態であるが、大学入試にもその影響が見られる。(11)(12)は典型的な理系論文であるが、if節が直説法、主節が仮定法になっている。この場合、〈真理値への関わり〉という点において、if節では直説法を用いることによって、〈実現可能性〉のある前提条件が提示されているものの、主節では、語り手の視点からトピックの〈推量〉、もしくは〈蓋然性〉の低さが描写されていると考えればよい。

(13) At first I thought he was kidding! "Why on earth would I choose to be bored?" I asked. *He went on to explain that if you allow yourself to be bored, even for an hour — or less — and don't fight it, the feelings of boredom will be replaced with feelings of peace. And after a little practice, you'll learn to relax.* (大阪外国語大)

(最初、私はからかわれていると思った。「いったいどうして退屈することを望むというのか」と私はたずねた。彼はもし自分が1時間、いやもっと少ない時間でも退屈したままでいて、退屈から逃れようとしなければ、退屈な気持ちが安らかな気持ちに変わっていくだろう。そして少し我慢すれば、リラックスできるようになるだろうと、説明を続けた。)

(13)では本来、時制の一致によって、if you allowed ..., and didn't fight ..., the feelings of boredom would be ...となるところである。また、前文との〈結束性〉から you would learn ...とすべきである。しかし、ここでは描出語法を駆使して「私」の心理を言説化するだけでなく、速報性を重視するメディア英語の代表的な語法の1つである

〈時制の不一致〉を導入することによって、臨場感を文面に構築し、読者の集中度を高める文体的効果も付与している。

誤訳分析試案として、大学入試レベルの長文に出題される仮定法における評価のガイドラインとリーディング・ストラテジーをまとめておく。

#### ■ 評価のガイドライン

- (1) 談話情報から直説法と仮定法の識別が正確にできる。  
→ [if+SVX ⇒ 仮定法 ⇒ 却下条件] とは限らない。
  - (2) 〈言語外情報〉によっては〈却下条件〉で解釈しなければならない直説法を識別することができる。
  - (3) 強制倒置によって条件節が表現された仮定法を識別することができる。
  - (4) 条件節相当語句によって条件節が表現された仮定法を識別することができる。  
→ if節の有無を仮定法判断の基準としてはならない。
  - (5) 仮定法を用いた婉曲的表現を識別することができる。
  - (6) 直説法と仮定法の混用した英文でも法の境界から話者・書き手の〈真理値への関わり〉を読み取ることができる。また、時制の不一致からも正確な読解ができる。
- ※ (1)~(4)は、No.76「英文の読み方を考えるⅨ—法とモダリティーの理解に向けて①—」の内容に対応。

#### ■ リーディング・ストラテジー

- (1) 主節動詞に助動詞の過去形 [would / could / might / should] があり、談話情報の基準となる時制が現在なら仮定法過去、過去なら仮定法過去完了を疑う。
- (2) 仮定法過去の場合、話者や書き手が、現在の事実と反する仮定を表す〈非現実的〉トピックに加えて、現在、もしくは未来において実現可能性が低いと考えるトピックも描写される。したがって、談話の表層構造にとどまらず、〈対立〉的深層構造まで読み取らなければならない。
- (3) 評論文や論説文において、第1パラグラフ第1

文から仮定法が導入される場合、談話の主情報へ誘導するための〈たとえ〉と考える。

- (4) 助動詞の過去形 [would / could / might / should] を伴う主節の後に、コンマのない were, had, should, could で始まる疑問文の形が後続した場合、従属接続詞 if の任意消去に伴う強制倒置の仮定法を疑う。
  - (5) as if[though] に後続する節の情報は、仮定法であれ、直説法であれ、〈比喩〉として処理する。
  - (6) 主語に仮定条件が内在すると考えられる場合、〈非現実的〉なトピックが描写されている主語を「～があれば、いれば」と訳出するとよい。
  - (7) 文全体に仮定条件が内在すると考えられる場合、文の命題を逆にして訳出するとよい。
  - (8) 関係詞節に仮定条件が内在すると考えられる場合、文の〈現実部分〉の命題を入れ換えて訳出するとよい。
  - (9) 副詞(句)に仮定条件が内在すると考えられる場合、主節における助動詞の過去形の有無と談話情報における基準となる時制を検索しながら読む。
  - (10) 談話情報の基準時制が現在であり、主節に〈S + 助動詞の過去形[would / could / might / should] + 思考・発言動詞～〉があれば、婉曲的表現と考える。
- ※ (1)～(5)は、No.76 「英文の読み方を考えるⅨ—法とモダリティ—の理解に向けて①—」の内容に対応。

(龍谷大学附属平安中学校・高等学校 校長補佐)